

## 英雄主義への弁明

—信仰を求める随筆— (その2)

ムルク・ラージ・アーナンド\*

小西真弓訳

### VI

私は1931年頃のある日、昼食の席でボナミー・ドブリー (Bonamy Dobrée) に「信仰をもちたい」と言ったのを覚えている。「もしそうしたいなら、信仰をもつように。でも個人的には、その必要を感じないけれどね」と、彼は思いやりを込めて言ってくれた。私は、もしそう言えるなら、幅広い学識と研究を通して、ドブリーが芸術的で公平無私な態度を取るようになり、精神そのものの研究に魅せられるようになったことを知っていたので、彼の見解を尊重した。そして、間もなくドブリーが「自分を含めて多くの人々が病人の（決して病床に伏せたままでもなければ、病人であることにそれほど不満でもない）状況にあるものの、治療に必要な代金を払う心づもりもない」ことを書いた時、彼には経験に基づいて行動する勇気があった。しかし、今日のインドの社会的・精神的崩壊と学問的な哲学、とりわけヒュームとバートランド・ラッセルの研究を何年もし、さらに世界大恐慌の年代をくぐり抜けてきた私には、自分の病は、大いなる不幸をもたらす厄介物であった。なぜなら、もし私がインドや世界の精神的・物質的混乱の原因を発見し、同世代の人々と同様に、私自身も何故その混乱に直面して失敗したのかを探るために執筆しようと決心し、インドにおける高圧的な政治・社会的権力や、ヨーロッパのファシズムの台頭に対抗するために行動しようとするなら、私には目の前の様々な問題を識別するための価値基準の試金石のようなものをもつことの必要性を信じる必要があったに違いない。私は、何らかの仮説をもたなくてはならなかったはずである。

私は何を目標として仕事に取りかかったのだろうか。私のインドとイギリスの作家たちとの関係、私が受け継いでいたインドの文化的遺産と、後に私が獲得したヨーロッパの遺産との関係は如何なるものであったのか。私は、純粋な芸術家になろうとしたのか、あるいは当時の政治生活において何らかの役割を果たさなくてはならなかったのだろうか。

私は、自分の心にこれらの疑問が生じた1931年から1936年の西ヨーロッパの精神風土を辿ることによって、それらに対する答を出し始めようとしたのかもしれない。

先ほど述べた友人のドブリーの言葉から明らかかもしれないが、その年代は確かに快適な時代ではなかった。世界大恐慌は、確かにすべての問題を理知的な人間たちの目により鮮明に映し出した。彼らは何らかの信仰を熱心に求めたりもすれば、信仰を捨てようともした。

しかし、彼らは自分たちの経済的な状況が、多かれ少なかれ、自由放任主義の資本主義の下で安定していたので、現状に疑問を抱こうとせず、これらの問題を当時の広範な道義的問題に結びつけるよりも、むしろ審美的な問題のある局面、ロマン主義対古典主義の問題に関心を寄せることに専念した。

D.H.ロレンスは、暗黒の神々に人間が無意識に身を任せるルソー流の自然主義を擁護したが、バートランド・ラッセル氏は、純粋に合理主義的な精神に訴えるような目標を確保することを人々に強く勧めた。ミドルトン・マレー氏は、詩的体験の最高の美しさを強調し、個人的な神秘主義を展開した。ウィンダム・ルイス氏は、すべての人々を風刺化した。T.S.エリオット氏だけが、より包括的な哲学に賛同し、自らは宗教的にはイギリスのカトリック教徒で、政治的には王党派、文学に関しては古典主義者だと公言した。しかし、これらのインテリたちのほとんどは、ヴィジョンの中樞を欠いていた。なぜなら、彼らはとても真面目で誠実ではあるが、いまだに誰も社会を総括したり、新たなより確固とした基盤の上に人生を据えるために必要である知的で道徳的な革命を要求しなかったからである。彼らはお互いの姿勢に関しては学識者にふさわしい寛容性をもち、広い領域にわたる現実を黙認したり、あるいは部分的には同情の念を抱いたが、人間に関する包括的な見解をもつことはできなかった。この第一線で活躍するヨーロッパ人が、自然科学者や経済学者、哲学者としてよりも、むしろ円球的な一人の人物として人間を全体的に見渡すことができないのは、私にとって本当に「知識人の裏切り」だと思われる。また、おこがましく感じられても声高にそう言うのは、私が人文学の不適切な教育を受け、人間の本質的な唯一の価値あるいは価値体系そのものよりも、人間や人間が抛り所にする価値観に関心をもちながらである。

私には、北海の霧よりもむしろ太陽の輝く熱帯の風土を通して観察すると、19世紀の自由主義と産業革命から生まれた複雑で多様な文明は、西ヨーロッパに専門分化に執着する様相を生み出し、物理学者は化学に、生物学者は数学に、哲学者は詩に、小説家は哲学や宗教に興味をもたなくなり、彼らは全体として政治や経済に関心を向けなくなったように思われる。世界は、独善的になり、多くのカテゴリーに分断され、そのカテゴリーもさらに分類されるようになり、ある一連の報告資料を他のものに関連付ける試みは、全くと言って差し支えないほど実行されなくなった。東洋の賢者はいまだに人間の精神に関して判定を下しているが、彼らは西ヨーロッパでは必要とされない愚者になり下がった。

この専門分化は、何人かの知識人が、インド人にとってはイギリス支配下に置かれるのが好ましく、そうすればインドの土民は、政府の行政実務を他者に任せて、芸術や人文学に対する自分たちの古代からの才能を開拓することにより有意義に従事できるだろう、と主張するほど進展してしまっただけで、知識人たちが政治やビジネスに及ばず影響がいかにか少ないかを知れば、彼らやその他の学問のある人々は恐らく、自分たちのアウトカーストあるいは自主的にボヘミア在住の国外追放者である地位を受け入れたのだろう。また、彼らは先駆者が後輩のために獲得した言論・思想の自由をもち、かなり検閲を免れていたもので、自分たちの感性をよく磨くことができた。しかし、政治的・経済的な欲求不満は別にしても、インドにいる我々は、英領インド警察を恐れてロシアやフランスの文学の傑作をこっそり読まなくてはな

らなかったが、知識人の地位について別の感情をもっている。我々は、自分たちの国で行われてるイギリス帝国主義からの解放を求める闘争にいく分なりとも関与しなくてはならないだろう。なぜなら、我々が全く自由に読んだり書いたりすることは、帝国主義から解放されることによって、実現されるからである。そして我々は、たとえ鳥瞰的な観点からであろうとも、全ヨーロッパとアジアの伝統を観察し、それらを比較検討し、新たなインドの建設の仕事に取りかからなくてはならないだろう。

このように私は、最初に人間の本質的な価値に興味を持って、政治や経済の問題、とりわけ私の幼い頃の背景であったインドの人々の悲惨な状態に向き合わなければならなくなることを理解した。

今になって思い返すと、私はこれらの曖昧模糊とした問題に夢中になっていたために、知り合いのイギリスの作家たちと自分との関係については、とても大きなギャップがあることをいつも感じていたことを告白しなくてはならない。私はどういうわけか彼らからとても親切にされ、最も誠実で純粋な友だち付き合いをしてもらっていたが、少なくとも1930年代になるまではずっと、インドについての議論になると、私の友人たちと自分とのやりとりには、常にある種の過剰な自意識があった。それは恐らく、私が部分的にインドの当局による辱めや無礼によって内面に生じた劣等感と、それがもたらした神経過敏に近いような強い感受性をもっていた故であったからであろう。しかしそれは、私の知る当時のイギリスの作家たちが（私には彼らが意識的あるいは無意識に黙認するのか理解できないが）社会の現状に目をつぶり、最も鈍感な政治評論家さえ利用する議論、即ちイギリスの本国と帝国領双方の恵まれない人々の前進を阻む議論、を黙認するのを、私が認識したためでもあったことは確かである。

私は、G.ディクス教授とのインドについての何気ない議論をしている時に、そのような気持ちが生じた特異な例を記憶している。教授は週末にケンブリッジに来て彼の家滞在するように誘ってくれた。私は、ケンブリッジの教師たちの中で最も親切で賢明なこの教授が、何らかの理由でイギリスやインドの軍人階級に対して激しい反感を抱いていることを除き、救いようのないキプリング主義者で、信託統治説を信奉していることを発見した。当時、私にはボナミー・ドブリーは静かな自由主義者に思えたが、彼は後に私にもっと共感するようになった。当時、ハーバード・リードは、まだ無政府主義者になってはいなかった。また、私の他のイギリスの友だちは、罪悪感を感じて恥ずかしいと思いつつ、その大多数がわれ関せずの態度をとった。

私は、彼らについて書いたように、意見が大そう食い違うことについての重要性を強調しようとは思わない。それは、人々が多くの事について意見が食い違うことを認めないなら、彼らの間にはいかなる友情も存在し得ないからである。しかし私は、もしイギリスの作家たちが当然だと思っている言論や思想の自由が、インドの友人たちに与えられていないことを悟り、さらに知識人が到るところで平等な市民権を享受し、狂信的な愛国主義が崩壊して、新しい考えをもった新たな人間の兄弟意識が生まれるように気を配らなければ、イギリスとインドの知識人たちとの個人的な関係には品性があり得ない、と確信している。なぜなら、

知識人や詩人以上に展望が普遍救済的な人物はいるはずがないからだ。コミュニケーションの発達や自然科学の普及によって世界は縮まり、明らかに全世界的な文明や伝統が既に、少なくとも前衛的な知識人の精神の中には、存在しているのではないだろうか。

無論、1920年から30年代には、派閥主義やナショナリストの帝国主義を批判する自由主義的傾向をもつ人々も少なくはなかった。レナード・ウルフ、H.N. ブレイズフォード、ロウズ・ディキンソン、E.M.フォスターのような人々がいた。知的な源泉を古代ギリシア人に求めて、彼らは社会が国家よりも偉大であると宣言し、自由人は奴隷よりも善であると確信していた。そして彼らは世界のどのような片隅でも、文明化された言語で語る人々と親しくなった。とりわけ、問いかけ、探求し、熟考しようとする人々、境界を破壊することを求める人々とは誰とでも仲良くなった。彼らは、どこから生まれた文明でもその美しさと調和を見聞きしないではいられなかった。おそらく、彼らは天使も踏むのを恐れるような所にも走りより、他人からは愚か者であると見なされただろう。しかし私は彼らを理解し、その愚か者の一人である自分の愚かさに満足した。

私は、ナショナリストの帝国主義を批判するために、憎悪の情に自分を駆り立てる必要はなかった。その憎しみは、イギリスのインド支配に対する自分の本能的な反感が積もったからばかりではなく、当時の私の最も合理的な考察からも生まれた。なぜなら、帝国と自由という観念は、全く両立しないもので、異民族にある民族が支配されるのは自由ではなく、隷属をもたらすからである。私は、偉大な道徳的かつ政治的な活動の渦中で成長した。その中で、私は当局から15回鞭打たれたことにより、外国人による支配は私たちインド人の生活をあらゆる方面で萎縮させるものであることを学んだ。私の帝国主義を憎む気持ちの中に、辛辣さがないとは言えない。なぜなら、私は何度も市民不服従運動に参加して、警察に殴られた後に投獄された何百人もの人々を目撃して、いかに怒りがこみ上げてきたかを記憶しているからである。しかし私は自分の想像力が、帝国主義に対する私の憎しみは、カーストや信仰、時代遅れの風俗習慣、禁欲的な宗教儀礼や慣習を伴う、インドの封建的な生活の残酷さや偽善に対する私の嫌悪感とも結びついているという事実にも盲目的にならないようにしている。私は、自分たちの社会的背景に存在するあらゆるものに問いかけたり、大きな屋敷から目をそらして、周囲の病に冒され、栄養不足で気力のない文盲の人々の悲惨さを感じ始めた。同世代の暗中模索する多くの若者の一人だった。我々は、当局が自分たちに屈辱を与えれば与えるほど、本を読むことや思想を抱くことを抑制すればするほど、外の世界の知識をよりいっそう貪欲に求め、我々と同じように物を考えると分かっているヨーロッパやアジアの人々と接触することをより渴望するようになった。そして我々は、自分たちの最も親愛な人々や近親者が好むか好まないかに関わらず、また当局が我々を説き伏せようが苦しめるようが、自分たちインド人と、それが誰であろうと何処に住んでいようが、その肌の色や体格にも関係なく、その他の抑圧された民族の解放を決断した。

私は観光目的ではなく、ヨーロッパ文明の秘密を知ろうという純粋かつ漠然とした野心をもって、人間の平等が完全ではないにしても、少なくとも言論の自由のある世界にしばらく住むために外国にやって来た。私は、古いインド文明社会の出身で、ヨーロッパの支配的な

文明の価値を探究する意図をもっていた。しかし、真のヨーロッパ文明の管理人たちや知識人たちが、術策を練る党の政治家たちの手中に落ちて敗北を受け入れ、政治家たちの下らない関心事に貢献することによってヨーロッパ文明が、自己実現や自己救済、単なる利己的な快樂としての芸術や詩であることを露呈していることに気づいた。私はヨーロッパの最善の精神が、間接的であろうと直接的であろうと、第一次世界大戦の悪行には、道徳的な影響を全く与えそねたことに注目しなかったわけではない。同様に、長期にわたる殺戮の後に訪れた平和が、政治あるいは社会的な問題に言及される時に、いつも知識人が肩をすぼめるような犬儒主義に関連していることに留意していた。

当然のことながら、個々の人々は暴力や貪欲に囲まれている時は、自分自身の身の安全、快適さ、誠実を求めて内にもりがちになる。また、ある個人はセンチメンタリストや感情主義者になれなければ、別の人間にある程度までしか関心をもてない。さらに、もし自分が国民として帰属する国家に信用が置けず、自分自身の規則や規準を展開できるとしたら、一個人はあらゆる社会的責任を放棄してしまうかもしれない。そして星座に到達することができるまで何度も人を誘惑するような垂直的なアプローチには、永続的な魅力がある。

しかし、大多数のヨーロッパの知識人たちは、水平的な位置関係を忘れがちで、その時代の現実から逃避して、目的ではなく手段に、主流ではなく支流に関与する傾向にあったので、私は失望感を覚えた。彼らは周囲の自然科学の成果や産業革命の恩恵に預かるつもりだったが、人生の意義については、あまり気にはかけなかった。一方、彼らはインド人に対して、牧歌的な小農の生活の長所を賞賛し、目下のアジア文明が墮落していることを無視しながら、その天を仰ぐ垂直的な飛躍には、口先だけのお世辞を言うのである。またヨーロッパの知識人は、アジアとヨーロッパの統合を探究してはいなかった。自分たちの、より優れた生活様式を保つために、物質的なヨーロッパと精神的なアジアという粗野な、真実を全く俗化するような差異化が気に入っていた。

私には、インド人や中国人との付き合いを通して、アジアの知識人たちが既に、地域性の感覚とより広い人間的な展望の双方において、ヨーロッパの知識人仲間よりも先に進んでいるように思えた。世界のその部分の一般大衆は「白人の重荷」というものを見通して、ヨーロッパ文明の先導者に、彼らが抑圧されている人々の解放を主張するのを承諾し、自分たちアジア独自の精神的、社会的、知的な価値を信じるという宣言をするべきか、問いかけ始めている。

インドにいる我々は、世界の質的な様相を大いに考察してきた。インドの宗教的・文化的な伝統は、我々にとって非常に重要だった。そして、平凡な実践の中でそれが墮落してしまうことから救済し、この我々の遺産から今日も我々にとって有用であるものを取り出すことに大いに関心がある。しかし、我々は自分たちの過去の価値観に拘泥して、新たな価値観が得られなくなるのを好まなかった。あらゆる文明化された生活や思考の基盤——教育、健康、政治・経済的自由は、我々インド人には、「原住民」で「より良いもの」は賞賛できない、「運命論者」で「劣等人種」、「腐敗している」、新しい創意工夫は使えない輩だ、というお馴染みの口実で、与えられなかった。その一方で我々は、人間らしく目覚め、自分たちの支配者

が我々を置いておきたい墮落した非人間的な段階から引き上げ、周囲の自然の力と同様に、我々自身を抑制したり支配し、新たな価値を統合するために、良しにつけ悪しきにつけ、新たな産業文明となる唯一の世界文明を完璧なものにすることに熱心であった。

このような包括的かつ多面的な姿勢を摸索するのは、孤独な仕事であり続けた。しかし、そのような時期に、私は彫刻家のエリック・ジルに頻繁に会い、とりわけ彼が発展させたような展望に興味を抱いた。私たちは、概ね人間性と人間の倫理的平等性に関して意見が一致した。また私は、彼の資本主義批判に惹かれた。さらに、芸術家の伝統からか、彼も私も独創的な芸術家、ある仕事のすべてについて責任をとる人間の価値について力説した。しかし彼の発想をすべてに結び付けようとしたその基本的な信仰のカトリック教は、伝統的なヒンドゥー教と同様に、あまりに儀礼的で、最終的な見解として私を納得させなかった。加えて、カトリックの究極的な基盤、あるいはヒンドゥーの信仰は、私が前述したように、「絶対的真理」があると主張することや、神秘的な試練から成り立っていた。私は、キリスト教の教義、あるいは幻を突然見たり、恍惚となって神と合体したと証言する時の聖人の誠実さを疑問視してはいなかった。しかし私自身は、そのような体験を一度もしたことがなかった。また私は、大多数の人々が、あるいは最も誠実で感受性が高く、才能に恵まれた人でも、そのような幻影を授かるとは信じられなかった。また、数人の聖人の証言を土台にして築かれたある一つの人生観は、それがいかに不変であろうと、混乱した文明社会にとって、実現できる価値あるものとして奨励できるものではない。ジャック・マリタンのように、ジルはキリスト教の無知と限界を意識し、自分の宗教的な信仰を共有しない人々との友好や協働を歓迎した。そして、彼は人間が社会の中で生活している事実を追求して、共通善を検討することが不可欠だと積極的に認め、初期のキリスト教徒共同体の共産主義さえ強調した。しかし、彼は人間性と人間の要求と利益を最高に価値のあるものと見なしたものの、世俗的な世界ではなく神の王国のみが人間を収容できると感じた。また、このような観念によって、彼は一人のカトリック信者として、ローマ法王の支配に引き寄せられた。私は、ジルが自らのカトリック信仰と、法王の回勅と明らかにファシズム側に立った干渉に対する反動として彼が賛同したウィリアム・モリスの社会主義との矛盾を解決しなかったと確信している。その矛盾はジルをカトリック教会から離そうとする一方で、機械を重んじる共産主義は、それが利潤ではなく奉仕であり、目的ではなく手段としてではあっても、彼を脅かして手工業システムへ引き戻してしまった。私は、ジルよりも彼の親方であるウィリアム・モリスのほうを受け入れる傾向があった。なぜなら、モリスは最後まで機械の敵であり続けたが、人間的で芸術家的な彼の価値体系の一部として、政治の価値を受け入れたからである。

私自身は、生きるための様々な価値体系の関連性を理解することは、大そう難解であると思った。戦後の危機の年代にあつて、ヨーロッパ、あるいは世界の他のどのような場所においても、何も明らかではないように思えた。古い価値基準や宗教の価値や試練、哲学、自然科学、政治・社会的な精神性は瓦解し、代わりに置き換えられる肯定的なものは何もなかった。確かに、私はヨーロッパ文明によって促進された官能的なレベルに基づく浅薄な快楽への願望や、個人的な幸福だけを渴望することは、人生の最高善ではないと断定していた。た

だ、自然主義的な快樂主義を破壊的に批判するだけでは十分ではない。なぜなら、それは大多数の人々の生活を支配する平凡な快樂主義を上流気取りで軽蔑することにすぎず、物質的な関わりを除外して精神的な価値への理想主義的な拘わりだけに終わるからである。一方で私には、人生を豊かにし、ありきたりの人間の平凡な労働生活を豊かにするという理由だけで、人類の上を目指す垂直的な成功が意義のあるものに思われる。現在や未来においてすべての誠実な人生は、多数の福祉を包括しなければならないのに、今のところ人類の歴史全体は権力や栄光、富を獲得するための人々の闘争の記録であり、大多数の人間は一握りの人間の手中にある質草のままである。そのために、いっそうそのように思われた。

現在のヨーロッパの怠慢な自由主義思想の無秩序は大方、我々がインドで直面している困難を考慮すると、私にはかなり悲惨だと思われる。我々は総てを受け入れ、神をキャベツや薔薇の中にも、最も高尚な空想の中と同様に汚物の中にも探し求めながら、十分長く無政府主義者であり続けた。汎神論者は、太陽の下で横になり、我々の傷をなめ、我々のような人間のどうしようもない運命について運命論的な語句や悲歌をつぶやいていた。

アラーの神とパラマートマン（真我、*Parmatman*）はいつも我々の話題になり、この世で持つことのできない物については、往々にして、偽善的に嫌いなものとして退け、意欲が欠乏しているのではなく、より精神的な物を好むとして、それを話題にしない。敗北させられた民族の我々インド人は負け犬となり、当局が押し付けた機械的で厳格な秩序を侮って、秩序ある人間のあらゆる業績にも軽蔑感を抱くようになってしまった。自覚しているかどうかの最終諮問として、直感に自信をもつことにのめり込み、我々は知力のある者を疑った。すべてをその究極的な要素に帰着させ、あらゆる物の背後にある隠れた普遍性のみに興味を見出す我々の流儀は、魅力的ではあっても効果のないものだった。物象化することにとっても忙しく、全く考える時間のない人間に反対するのと同様に、何のために人間がここに存在するのかを問うことに同意し、我々はずっと存在の足かせから解放される解脱（*Moksha*）について永続的に議論してきた。我々の先人たちは、原理的な問題を新たに問いかけようともせず、ただ数珠をまさぐりながら、お馴染みの答を繰り返す退屈な人種だった。なぜ世界が創造され、悪が存在するようになったのか、我々は自分たちの人生をいかに生きるべきか、人間が動物、植物、生命のない物質よりも優れているのはどのような点なのか、というような具体的な問題が、新たな観点から検討されることはめったになかった。オルダス・ハクスリーやハード（*Gerald Heard*）のような啓蒙化されたヨーロッパ人は、自らを方向転換させてスフィンクスの謎に帰着したせいも、より高尚な生活を求めるインド人の大望に共感を覚えた。超絶主義は、特に死に面しては、土台になるものが何もなく、

しかし、生命についてはどうなのか。人間の進歩という観念は、H.G.ウェルズによって作られた単なる中産階級の神話だったのか。我々の中の何人かである聖者や芸術家たちが、質的な生き方の最高で持続的な満足感を味わったという理由だけで、我々はいつも古い世界の悪循環に閉じ込められたままでよいのか。何百万もの文盲の人々の間に潜む偉大な精神は、すべてミルトンの声を小さくしたような状態にいるべきなのか。

私は、若者と年輩の人々との関係における基本的な相違について熟考し、多くの点でヨー

ロッパ文明社会は既に古い世界であり、現代のアジアは若い世界であると発見した。確かに西ヨーロッパの精神風土は、私に自己を見い出させたが、私の育ったインドの精神風土とは異なっているように思われた。もしそれが単純化でないとしたら、この四分の一世紀の間に、大方のインドの若者は、ある種の英雄の時代を潜り抜けてきたと私には言える。我々のすべての行動や思想、言論には——あらゆることを我々は実行したが——新たなインドを創造し、新しい世界を築かなければならないという信念が吹き込まれていた。無論、我々の言論や行動の多くは、偽の英雄物語だった。ある者は、ラーマ神がランカの王、ラヴァーナとの戦いに出かけた時に、鳥のガルダに乗って空を飛んだという理由で、古代インドに飛行機があったと主張した。また他の者は、我々は世界で最も古い民族の一員なので、もっと偉大であるはずだと言った。そのような、明らかに現在のインド人の力不足を償う性質を帯びたような誤謬は別として、我々には誠実で生き生きとした他の信念があった。例えば、我々は総て、程度の差はあれ、野蛮な権力を侮辱する精神力が発揮される光景を見て行動を起こした。また我々は、周囲の非常に多くの人々が、真に英雄的な忍耐をもって貧困やむき苦しさを忍んでいることを認識している。タゴールのような作家にとって現実はいくらにも見苦しかったので、これまでインドでこの苦難の叙事詩を巧みに書いた者はいなかった。新たな世界に生きる個人が直面する複雑な問題が未解決なうちは、インドで叙事詩を書くのは困難だった。しかし、意義のある大切なことは、代償を見い出すことや問題をそらすことに同意する人々さえも皆、インドの再生、復興あるいはルネッサンスを信じていることである。

ここイギリスでは、私は英雄主義あるいは信仰に対する根深い不信感や、ある種の政治的な懐疑論、疲労感や倦怠、未来に対する絶望感が蔓延していることを発見した。

しかし、私は自分のインドの背景を考慮すると、すべての物事を哲学的なふるいにかけても、悲観論をもつことも、満足感を抱くこともできなかった。

この精神的な闘争のストレスによって、私にはインドの古い哲学や宗教が永遠だと考えることができず、もし民主主義や個人の自由のような新たな価値観を獲得したら、我々はヨーロッパの伝統を探求するべきだということが次第に明らかになった。そしてそのような見解をもって私は、我々インド人の宗教や哲学の高尚な抽象概念や美しい詩の中に発見できる希望や大望は、その時代の明白な事実から生じる知恵や夢、幻想の真髄であり、今日利用される前に深く理解され、できれば再解釈されるべき伝統である、と考えがちだった。

ある文明の精神的な高揚とその物質的な福利との間には、正確な相関関係はあり得ないが、ある時代に問われる質問の正確さと鋭さは、まさにその時代の闘争、とりわけその質問をする年代の人々の苦闘を反映している。このように、永続的で人間以上のものだと思われる宗教は、結局は人間の生活、民族やカースト、階級、国家間の争いの産物であることが分かった。それらの問題を表現している暗喩は、確かに様々な年代の世界の闘争であり、現実の問題であること示している。自然の歴史の発展と継続は、新たな信仰や信念の上層で統合しようという試みによって長年中断されたが、あらゆる複雑な絡み合いを通して、ゆっくりではあっても、人間の生存競争の問題と、より良い高尚な人生との関係を発展させてきた。



## VII

もしこれが事実だとすれば、私は歴史的変遷や、人類はまとまりのないパターンを形成していたが、あらゆる人類の矛盾した衝動の開花としての文化を称賛することに関与してきたことになる。それは、私にとって歴史的な考察が、これまで発見された中でも最善の尺度だと思えたからだ。

それではインドでは何が起こり、世界の出来事という観点から、その事件は現在どのような位置付けられるのであろうか。また私は、インドの事件すべてにどのような関わりをもっているのだろうか。

ありきたりだと思われることを覚悟で、あえて私は、人間の性質が時空を越えた変わらぬものであるかのように、人間の心理と行動の動機を抽象的に分析しても、これらの質問に対する答えは得られないと言う。この私の言説は、何も体现しない永続的な不機嫌な気分を表す大言壮語になってしまうだけであろう。しかし、一つ二つの強烈な瞬間に関する、微妙でもっともらしい陳腐な言葉は、意識の分裂した状態を抽象的概念の覆いで包み込んだ結果であり得た。同様に、歴史の変遷はあまりに複雑で難解なので、歴史を理解してさえいれば、黄金時代が明日到来するという途方もない希望を抱くことは認められなかった。なぜなら、時の試練によって失敗に終わった熱病的な振る舞いも、あらゆる事実を知るのも容易ではないからである。

しかし、人間関係は、年月を経て、一つのかかなり歴然とした社会的な段階から別の段階へ発展してきたように思われる。そして、多くの人間の経験が余剰物であるにもかかわらず、今日の個人は、最初の輝きがある不活発な非有機的な物質から生命体へと明かりを灯し、さらに様々な有機体の相互作用を通して、現代社会のより複雑な有機体に発達した時代へと、何十億年も作用したあらゆる力の結晶であった。

生物が存在する前に生命のない物質が存在していたことは、今日の哲学者や自然科学者のほとんどが認めている。しかし彼らが躓いた世界の生命の発生に関する問題があった。

哲学者の中には、神の介在説に依存するのが簡単だと思う者もいれば、一方で他の者は、物質主義者や現実主義者さえも、根源的生命力を信じる傾向があった。無論、生命体と非生命体に生じる化学変化には、紛れもない類似性がある。偉大な天上の神との協力を好んで、しっかり守られた仲間を作る哲学者たちは、理想主義に疑惑という特典を与えるために、この現象を解釈するのを好んだ。そして、生命が何百万年、何十億年を通して進化してきた事実、即ち原子核運動をするコロイド状のウィルス、バクテリア、一片のゼリー状の物質や植物、他の有機体に寄生して可動する有機体や魚、大気中の両生類や哺乳類から、あのキツネザルのような生物、人類の類人猿の先祖へ、さらに何百万年も経過した様々な年代の道具をもつ文化へと進化したこと——これらの事実によって、自然科学者は眩暈を覚えたので、自然の力を推進したい衝動にかられた。

しかし一旦、エネルギーの変化や生物の細胞や進化の事実を認めると、マルクスの仮説は

物事を理解するのをかなり容易にする。最初に自然のプロセスが進行し、突然の「飛躍」によって中断されて、量が質に変化したり質が量に変化する。さらに人間は自分たちの目的に役立つ他の物質を作るために、機械的、物質的、化学的な所有物を利用する。自然は、人間の活動の代行者の一人となる。それは、人間が自然を自分の身体的な組織に追加することだと言える。そして人は、いかに物事の大そう複雑で矛盾した局面や過程の相互作用が、先史時代と有史時代の全体、道具を作る段階以前の人の生活と、文明化された人間社会の段階すべてを発達させたかを理解する。動物は、自分の環境に反応し、自然に適応する。人は自分の主要な要求を満たし、歴史上の複雑で難解な活動の要素に関して、かなり納得のいく説明ができる経済的な進展を促す。

生産手段の搾取は、絶え間ない人間と自然の相互作用のために、様々な社会の場面で、社会の発達に固有の矛盾を生じさせる、生産諸関係を創出する。そして自然界と同様に、社会でも対立する勢力の不均衡さが、更なる発展を行き詰らせて閉塞状態になったとき、社会革命が起きる。それは「跳躍」によって、社会革命に必然的に含まれる動的な対立を経て、生産関係を更なる段階に進ませる。そして、領土が政治的実体であると同様に、それは経済的・社会的な実物なので、つまり国家の政治的権力の土台なので、我々は領土権のバランスの絶え間ない変化を発見する。その変化は、財産を持たぬ哀れな人々を歴史の中で消え行く者として、変化する世界の勢力の背景をなすぼんやりとした影へと追いやっている

例えば、600年前に世界の大部分の地で、タタール人の名は人々を震撼させ、モンゴル騎兵団の刃がまばゆく光る前に、人々は恐怖に駆られて逃亡した。300年前には、ムガールの人々が、デリーの玉座をあたかも永遠のごとく占領したかに見えた。今や、イギリス帝国主義がカシミールからコモリン岬まで、ビルマからシンド地方までを統治している。... 世界の一つの国、ロシアでは資本家階級の関係者は、プロレタリアート革命によって転覆させられ、無産者階級がファシズムへ進み、合理的資本主義の前衛隊が、この社会主義国を攻撃している。

私は、崩壊した帝国、フランス革命、自由主義、資本主義の帝国主義、ドイツ国民国家や他の世界システムの巨大で不可解な事実の寄せ集めについては、多少なりとも尤もらしく解説することができた。それは、いわゆる歴史のいくつかの「神秘」と呼ばれるものを説明し得る要素の弁証的研究だった。...

私は生まれながらのインド人であり、イギリスの臣民であった。先祖伝来の職人業から縁を切って報酬目当てに英領インド軍に加わった父親と、小百姓出の母親の下に生まれた。私は人生の現実から自分を遠ざける全く有害な教育システム下にあった英領インドの学校やカレッジで、数少ない特権をもつ一人として教育され、育て上げられた。しかし現実というのが痛切に感じられるようにもなった。また、私はおぼろげながらも、イギリス帝国主義がインドを支配して生み出された社会的混乱や分裂を認識した。

樹液が湧き上がるように、私は英領インドから逃げ出し、世界を放浪し、ロマンスを求める冒険をしたくなった。しかしあでやかな花は、甘い香りがするとは限らなかった。恐らく自分の体験を思い出して口から出る辛らつさは果実を色づけ、貧困や危機の枝からもぎ取る

ことのできるものは意味の無いもので、屈辱や暗黒は酸っぱい味しかなかっただろう。あるいは多分、甘美な果実は重くて丸く、熟してはいるが、他の根——権力や両親、学校、カレッジ、将来の雇い主と衝突する肥沃な土地に育つ根——からしか育たなかったのだろう。

それ故、私は自分の肩にかかる二つの荷物、ヨーロッパの伝統というアルプスと、自らのインドの過去というヒマラヤ山脈を評価しようともがき、自分の五感すべては祖国の歴史の重要性を悟って疼き、その心と頭脳をインドを墮落に導いた原因の究明に捧げている。そして私の中にあるものすべては、最初に私を陰鬱な反逆精神を募らせることに専念させた。それで、私は反動主義的な誇大妄想の言い逃れの背後にある、経験した事実についての真相を理解することができるようになった。

散漫な読書の習慣がある人々が偶然遭遇したように、1853年にマルクスが『ニュー・ヘラルド・トリビューン』に寄稿した、彼のインドに関する手紙のシリーズが、この頃に私の手に入った。私は折しも、イギリス帝国主義の植民史について執筆していた友人ラルフ・フォックスと、詳細にこのシリーズについて議論した。そして総ての新たな世界が私に開かれた。私の過去の読書のすべての糸は、結び目を作ったが、突然まっすぐにほぐされたように思われた。私はインド史ばかりではなく、ある相互関連の中で人間社会の全史を見つめ始めた。マルクスの弁証法が、私が読んでいたヘーゲルから自然に発展したという事実は、私をいっそうマルクスに夢中にさせた。そして無論、マルクス主義の最もよいところは、それが闘争的な教会人のドグマではなく——マルクス主義がマルクスを預言者とする新たな一つの宗教だと宣言する中傷者もあったが——社会学のための一つの自然科学であり、合理的な方法で、新たな発見に繋がった仮説であったことである。

私は今や「愚かにも」インドを征服したイギリス人が、インドに社会革命、広範なアジアの古い経済秩序の転覆をもたらしたことを理解している。

いかにして一握りのイギリス人が、このような事を成し遂げたのか。

イギリスの男爵たち、最初の革命的「中産階級」は、ジョン王から大憲章マグナ・カルタを獲得した。この男爵階級の子孫たちは、14世紀から15世紀にかけて最初の革命を覆し、二度目の中産階級の革命をもたらした。この勝利の全盛期にテューダ朝のエリザベス1世は、1559年12月31日、ロンドンの商人たちにインド諸国と貿易取引をする特許を与えた。

これらの商人とその後継者たちは、かなり組織だった中産階級になったが、かの大海原の大冒険や公海上での略奪行為、インド諸国への新たな航路の発見計画に取り組み始めた。そしてそれらは、スペイン人、ポルトガル人、オランダ人、フランス人との相次ぐ闘争の後に、イギリス人がインド貿易を支配するという結果をもたらした。冒険家、流れ者、商人や紳士たちは、インドの風変わりな文明や途方もない財宝についての旅行者の話や、インドには金やダイヤモンド、絹、キャラコ布、香辛料が満ち溢れているという噂に魅惑された。東インド会社に所属するこれらの商人たちは、インド諸国へ行って、領地を征服し、100%から150%の配当金を享受した。加えて、彼らは会社の業務に従事するかたわら、下僕たちと共に、略奪行為をして財産を築いた。

インドには、まとまった中産階級が存在しなかったために、イギリス人の征服者たちに付

け入れられた。「封建的」なムガル帝国は、その宮廷がいかに壮麗であろうと、芸術や文学を庇護しようと、搾取はできなかつた。なぜなら、それは宮廷が首都で繁栄している一方で、小さな村落共同体の中で生きて死んでいく無数のライヤット (*Ryot*, 耕作農民) の骨折り仕事を搾取る巨大で分裂しがちな機械であつたからだ。また宮廷とライヤットのの間には、徴税人が地方の支配者の大邸宅から時々来て、物納で納める税を徴収して立ち去る以外は、ほとんど結びつきがなかつた。

ラージャ (*Raja*, インドの王侯) とライヤットとの間に緊密な関係がないことや、国家側で中央集権や経済発展の手段として、巨大な灌漑事業や確実な通信手段を推進しないことに加えて、ムガル帝国は、辺境の地域との連結が弱いために崩壊しつつあつた。そのために必然的に地方の支配者が反乱し、外国の商人が好機を得ることになった。

それに続いてイギリスでは、18世紀にインドの富を略奪したり、さらに世界市場において産業革命によって成熟した中産階級が三度目に政府を倒した時期に生産された繊維製品、金物などの安価な機械工業製品が充満したために、資本が蓄積され資本主義が発展した。

そのため、繊維製品と洗練された工芸品の美しさを求めて西洋から到来したあらゆる類の流れ者のメッカであつた国インドは、ごみ捨て場、イギリス資本主義の植民地になってしまった。土着の産業は破滅し、手工業者は失業者の墓場に捨てられ、インドの大地はブラッドフォードやマンチェスターの工場のための原料供給地に変化した。

このインドとの貿易の利益は、あまりに莫大だったのでイギリスの大事業家は、東インド会社の従業員の略奪的支配による無秩序に終止符を打って、その行政支配をイギリスの女王に移管するのが適切であると考えた。その実現によって、インドは完全にイギリスの支配下に置かれた、インド農村の原始的な経済活動は破壊され、より効率的な官僚政治が発展し、中央集権統治、鉄道や道路建設による国家の統一がもたらされた。

イギリス本国では製造業が効率の良い状況に発展したので、ブルジョワたちは、原料の供給源や安価な労働力、市場をより近くから得ることによって、より大きな利益を蓄積するために、資本を従属国インドに輸出して、当地で製造業を始めようとした。莫大な利益を得た後、彼らはインドの自分たちの一部の資本が、本国での投資を部分的に相殺していることに気がついた。そこで彼らは機械的にインドの産業の発展を低下させた。インドで機械作りの製品が押し寄せたり、当初の産業化の取り組みによって、雇用を奪われた手工業者は、既にひどく逼迫していた国インドをさらに圧迫し続けてきた。何百万もの失業して破産した、路上を放浪する小農が存在した。農業危機を救うには、数匹の家畜以上のものを必要としていた。

私が生まれた年代は、祖国インドの歴史的な転機だつた。自分たち自身の侵略行為の論法によって事態をそこまで進めながら、イギリスのブルジョワたちはさらに状況を進めるのを拒否した。一方、インドの人々は、自分たちの国が搾取されているという意識を高め、当局に挑戦してインドにおける社会革命と、その必然的な行く末を実現する権利を要求するようになった。我々は、生産手段の制御を獲得し、利益を貪るシステムを廃止し、最新の自然科学や技術研究の助けによって大規模産業化と社会計画に取り組むことを望んだ。それだけ

が、我々に祖国の大飢饉を緩和させ、自分たちを尊厳ある人間家族の一員にさせることになるだろう。

## VIII

それは実に単純であったが、非常により複雑なことでもあった。

そこには、新たな観点から見た現代社会の完全な変容と同様に、他ならぬ歴史に対する自分の見解の新しい方向付けが関係していたのである。なぜならば、インドにおいて我々は、文芸復興のみならず巨大な変革に直面しているからである。

人間社会に対するこうした見地がもたらす結果は途方もなく、それが約束する新世界の一面を想像するだけで、人は圧倒されてしまう。

もし、現実が物質的で進化しながらも不完全であるならば、もし、人とその精神がこの現実の産物であるならば、もし、精神とそれが一部をなす現実が常に相互作用する結果として知識が生じるならば、さらに、もし、この知識が行動を通して獲得されるものであるならば、最後に、もし、現実の新たな様相が、常に人間の行動と知識の範囲内においてもたらされるのであるならば、社会歴史的な変遷に不可欠な知識の範囲というものは無限であり、かつ人間の誤謬性は疑う余地のない事実である。

知識を拡張してゆく義務は必須である。なぜならばそれは歴史的変遷に固有のものだからである。もし人が自分の運命を掌握し、かつ獲得した遺産を拡張したいのであれば、何らかの行動をとる必要がある。マルクスが辛辣に述べたように、「哲学者はこれまで世界を解釈してきたが、大事なのはそれを変えることである」。

しかし、人はどこから始めるべきだったのか。

当然のことながら、だれも、人間社会全体を理解するために、それに噛み付いて丸呑みするようなことはできなかった。そうではなく、人はまず、たとえそれが取るに足らないことであっても、世界の辺境においてさえ、自分の年代の中での現実を変化させ変容させるために、宇宙に対する新たな見解を実践するために、自分が貢献できる何処かから、何かを始めるべきであって、そうすれば人生が、自分および他の人間のために新たな意義を持ち始めるのである。

しかしこのことは、ある人々にとっては途方もない仕事に思える。とくにその育った社会が混沌としており、人生の現実が、虚偽、迷信、独断的教理、不合理な信条といった分厚い地層の下に埋もれており、知識はというと少数の利害のためだけに周到に積み上げられ、かつ啓蒙へと向かう全体的流れが、現行の社会秩序の変革を防ぐべく、信仰の逸脱の只中で意識的あるいは無意識のうちに封じられてきた場合は、特にそうである。

したがってまず第一に、現実と対峙するためには、人の挫折の原因および人の失敗の理由を研究する必要があったのである。なぜならば、それは失敗以外の何物でもなく、どう試みても成功とは考えられなかったのである。つまり、哲学の勉強ばかりに何年も費やしたものの、欠陥的教育のせいで、自分の年代という現実についての知識を得ることができず、ただ

人間の経験についての粗末な原則の曖昧な理解以上のものは与えられなかったことを知るに至った事実である。自分の運命を知るのに失敗し、夢見るのに失敗し、把握することに失敗したのである！

さらに、例えばインドのような国家に存在する、恵まれない大勢の人々を見るときに、彼らがいかに故意に人間以下のレベルに抑えられてきたかを知るのである。そうした観点からは、知識についての理論および哲学的命題にかかわるすべての仮定は、茶番、あるいは一連の冗談に思えるのである。

我々の支配者たちには、非熟練労働者（Coolyはアジアの無学歴な低賃金労働者を指す差別的呼称）に、自らを向上する機会を少しでも与えようという考えは皆無であった。そうした人々は人間以下のままであるべきなのである。彼らは、朝から晩まで、若いも若きも、男女を問わず、支配者のために働き続け、犬のように扱われるのである。彼らには一助となる社会保障も健康保険もなく、高齢者年金、養育補助もない。有給休暇などはなく、長時間労働から解かれることはない。彼らに休みを与える必要などないと、支配者は信じていたのである。ましてやかかる労働者の子どもを学校に行かせるなど、愚かを通り越して甚だしい罪であった！なぜ愚かかかという、労働者の子どもが支配者の子息より多くの知識と高い技術を習得するかもしれない、なぜ罪かかという、書物から得た知識は世襲の技や特質を蝕むと考えられていたからである。さらに一般的観念として、インド人が教育を受ける場合、それがどこで終わるのか見当がつかないという点がある。この問題について考察すればするほど、アジアおよびアフリカにおける人材の低落は実例として成り立つ。例えば、もし問題の焦点が労働者のより高い賃金およびより短い労働時間であるとした場合、雇用者が信じる高次の理念は、直ちに、そうした要求が偽りであるとするのである。この失業者があふれる世の中で仕事があるという名誉があればそれで十分ではないのか？労働者は衣服など必要としていたか？いや、ぼろきれがあればいいだろう。もともと衣服など「なし」の生活に慣れていたので、それより良い生活は知らなかったのだから。ベッドで眠る？なぜ？彼らは地面や店の入口、繁華街の排水溝のそばで寝るのが習慣であったのだし。そもそも「我々がやって来て十分与えるようになった」以前は、彼らはどういう状況だったのか？「彼らに費やしたとてつもない総額を考えてみてほしい！」「帝国を維持していくのは大変な出費であることはご存知でしょう？」資本主義制度の不平等は、それらの国々では当たり前のことである。しかし、植民地制度下においては、人は人間であるべきではなく、キツネザル、チンパンジー、あるいはゴリラであるべきなのである。

しかしながら、仮に労働者が一致団結して自らの要求を提示しようものなら、雇用者連合は各紙面にそれについて大仰な歌を掲載し、大英帝国でのゼネストを非合法化した悪名高き法律のような法案を可決するのである。さらに、利益付き個人財産制度は、国家法制度の枠組みのなかで民衆から選出された代表者の合意により、それが法制化されることとなる。そして、法制度の装置全体が支配者の権利を保護する目的のために強化される。高位の検察官や警察官が高い報酬を得て名誉ある立場にある一方、学校教師や教授たちはぎりぎりの給与しか与えられないことは何も驚くことではない！なぜなら、検察官や警察官の役目という

のは一般市民に奉仕するのではなく、威圧することだ... 実際のところ、資本主義国家システムのほぼ全体、官僚制度、警察軍団というものは、文明の高みを構成する要素、つまり個人資産、宗教および国家を保全すること、およびそれらに対する敬意を吹き込むことに専念しているのである！

ここで問題となるのは、人類が、その知識および権力を、考えたこともないレベルまで増大させた何千年にも及ぶ進化を経たのち、自らの原始的本質を変容させ洗練させた今、果たして、現時点における世界的発展の実情をその最終段階として受け入れられるのか、あるいはその本質を把握し経験を合成するその能力をもって、階級やカーストの不平等を廃止するべく、それぞれ個人の生活に対する社会的および政治的義務を適合し、自らを挫折させてきた拘束から解放するような公平な文明へと進化させ、かつその余暇を自らの精神を養うために有効利用するのか、ということである。人にとって食の必要が第一なのか、あるいは心の必要が第一なのかという命題は単純すぎるであろう、なぜならパンも心も相互依存的に必要であり、生きた屍に価値があろうとなかろうと、何よりもまず命があるという事実が大前提だからである。

私自身、羽振りのいい中流階級の仲間入りを果たした一員であるということのみならず、すべてに対して金で支払わなければならない20世紀のこの厳しく、一方で美しい世界を相続した人類の一メンバー、何億人の一人であるのだということをひしひしと実感し始めたのだ。

もちろん、私の生活水準は常に比較的恵まれたレベルであったので、貧困層の苦悩を直接感じることはできなかった。いや、私の場合それは二次的屈辱であった、つまり他人の苦悩を見るという屈辱である。自分自身、富裕層に対する自分の嫉妬が、社会的正義に対する飢えとしてどれほど嫌悪的であったのかはわからない。恐らくそういう一面はあったであろう。さらにインドにおける我々の生活の不条理が私の見方に影響したのでであろう。しかし私はそれに対して謝罪はしない。なぜなら、インドで私が見てきた悲惨かつ惨めな状況の只中で、物質的幸福および繁栄は、真の幸福と美への欲求とは全く関係がないのだと信じることは、容易ではないからである。よって、私は自分の育ったインドでの思い出を通して自分の人生を再構築しようと試みた。つまり私が成長する過程で常に感じていた虚しさ、退屈、虚栄、および困惑を通して、かつ自分の周りにいた人々の生活とは関係なく、私は罪悪感を覚えた。なぜなら不必要な苦しみは、自己満足的な自負心あるいは感謝の念とは関係がないからである。

## IX

私は、自叙伝的な長編小説に取り組み始めた。同時に過去を思い返しながらかつ将来を予測するという感覚的恍惚の中に生き始めた。その間、私は人生の意味を探求する中で、隷属という事実に関するあらゆる側面を研究している自分に気づいた。私がそれまでに知るところとなった人物の生活を回想し始めたとき、私を感銘させた最も重要な事実は、人々の野望や宗

教的情熱というよりは、人々がお互いに対して積み上げてきた憎しみ、お互いから引き出してきた苦痛、およびそれを理解することのできる仏教的な共感があったことである。私が作家として直面しなければならなかった問題というのは、厳密に個人的な性質のものではなく、個人対大衆にかかわる問題であった。作家としての情報源は、私の記憶および想像、作品の実質は自分の様々な経験全体、そしてそのテーマは、人間全体および人間関係の全域にわたるものとなり、その一部を扱うことではなかった。

人間の危機に対するそのようなアプローチは、小説に含まれる哲学的墮落を好まず、かつかいかなる予言や憶測をも疫病のように忌み嫌う多くの人たちにとっては、胡散臭いものである。しかし、ヨーロッパの中産階級の作家たちが、彼らの想像力が及ぶ限り、個人的大義と同様、哲学的、社会的、あるいは道徳的大義を含め、それらをどのように弁護しなくてはならないにしても、私自身は、自分自身の個人的経験に基づいて、我々の時代にある問題、つまり現代の固定概念における人の感受性、現代人の悲劇といった問題の核心を直接取り上げることに對して、何の弁解もする必要はない。20世紀は人類の歴史において重要な転機である。我々の主要な闘争は、個人の価値観の探求であり、それについて再解釈と論議が行われる限り、その探求が論点であるということに変わりない。しかし同時に、この「鉄」の時代の影響下にある、工場であれ、村落の広場であれ、邸宅の応接間であれ、そこにいるすべての人間の感受性を研究することも必要である。なにもそれは、想像的創造から教訓主義への移行を意味しているわけではない。むしろそれは、インドの文学世界にはまず登場することのない新たな人々全体の創造的物語への導入と言えよう。それは、多少不調和なりズムがあるものの、それを詩歌を用いて表現する試みでもある。こうしたアプローチに対しては様々な意見があるかもしれないが、私はそれを、翼のついた、たちまち広まる実話の詩的なリズムへの飛行と呼ぶことにする。

私は、熱狂的愛国資本主義の真髄ともいえるファシズムが人間の基本的自由を阻害し始め、満州国、アビシニア、スペインあるいはヨーロッパ大陸に於いて一連の侵略攻撃がすでに起き、第二次世界大戦へと続く期間に育ったため、一市民作家としての責任を強く自覚し始めた。この点に関しては、インド人である私の場合、あれこれ学ぶ必要はなかった。なぜならインドでは日常は政治であり、政治は日常であったからだ。特に過去四半世紀の間、我々のほとんどは、強制収容所、拷問、投獄、市民的および政治的自由の抑圧といった状況を見ながら育ってきたのだ。

仮にヨーロッパの年老いた作家たちがこれらのあるいは類似の問題に対してそれほど反応を示さないとしても、アラゴン、マルロー、オーデン、スペンダー、デイ・ルイス、その他の若手作家たちがその作品で声高に述べていることからすれば、彼らが問いかけている問題はインド人のそれと非常に類似性があり、人種や皮膚の色を問わず、同様の概念を共有し同様の課題を志向するということは、確認されている。1931年の経済危機、さらにはヨーロッパにおけるファシズムの台頭を境に、西洋の「民主主義」支配者たちの、活発な支援ではないとしてもその黙認によって、帝国主義およびファシズムという形態の両方において資本主義の腐敗が明らかになり始めた。そして平和と同様、自由は不可分のようだった。我々ほど



こにしようと、ドイツ、イタリアおよび日本のファシストからの攻撃、および自国の反動主義者から世界の遺産を守り、人類に善益をもたらす潜在的パワーの備蓄を利用しながら新しい健全な文明を築き上げ、すべての人間のため政治的かつ経済的自由を達成するのを援助し、その努力の過程で自分たち自身とその環境を変化させる、という信念をもって全員が一致団結していた。エリオットを含む少数の作家は人間の本質的罪深さを確信して、こうした運動からは一線を引いていたものの、彼らはそれぞれのスタイルにおいてファシズムより民主主義を志向していたのである。才能あふれるセリーヌのように人類の善意という考えに疑義を持った少数は、すぐにファシズム側へと行き着いた。

私がこの期間の大半を過ごしたイギリスでは、いよいよ若い知識階級が目覚め始めていた。私は他の作家たちと共に、自分たちの目の前の危機に立ち向かおうと試みた。このすべてを巻き込む危機には、ヒトラーやムッソリーニのみならず、大英帝国信奉者、あらゆる正教会、および腐敗していくすべての精神的かつ文化的価値観、さらには進歩あるいは完全崩壊に向かう生命そのものが関係していたのである。

文化を守るために起こるべき闘争のなかで、私は、作家が他の人々と共に、市民および芸術家として細心の警戒を払う必要があることを感じていた。現代の商業社会が作家を孤立へと追いやっているという正にその理由により、作家は一人の人間かつ才能ある芸術家として、自らを、敗者、弱者、およびホームレスといった人々と結び合わせ、社会変革に貢献する必要があると、私には思える。そうすることは芸術家としての才能に対する背信行為ではない。なぜならば、皆それぞれ、自分に一番合った表現方法を選択する際、自分自身の志向性に従う必要があり、芸術、哲学、道徳および宗教それ自体を目的としつつ、自らのためにそれらを追及する従来の専門家的姿勢というのは、単に責任への恐怖を表しているに過ぎないからだ。一方でほとんどの人々は、または純正主義者でさえ、無意識のうちに自分の愛人と社会との言い争いを表現しているのである。

そこで、ゲーテという顕著な一例が私にとってかなりの衝撃を与えた。この詩人は、科学者であり一市民でもあって、そのすべてを見通しているような目でいかなる人間の体験をも把握している偉大な天才だった。私の祖国では、タゴールがそのような人物であった。確かに人間の知識のあらゆる専門分野における大きな発展により、今日、すべての分野においてその権威者のように語ることでできる人間はいない。また誰でも、芸術家であれ、哲学者であれ、あるいは科学者であれ、こういう危機的時代であっても、人間である以上すべての人に共通である家族の責任、市民としての義務、その他の責務を負うことを拒否できる者もない。しかし、「人間の条件」には興味がないという作家がだれであれ、その人物は、格好をつけているか、孤立主義への狂信的な愛に屈しているのである——それは人と違うことを望む若者の捻れたかつ小賢しい防衛である。

しかしながら、誠実かつ活気に満ちた芸術家にとって多大な意義をなすのは、ファシズムに対して人類の文化を消極的に防衛することのみならず、古い価値観を批評しつつ、かつ新たな価値観を進化させることにより、自分自身を社会に再統合させるという積極的な動きでもあるのだ。あらゆる場所で古い世界は崩壊しつつあり、心の死んだ者は伝統的価値観にし

がみつぎつつも、自分たちの世界を崩壊させ、今彼らを支配している新たな「運命」を理解することもできない一方で、力があるという大胆なふりをする弱者の感傷主義の上に、その運命に結びつけられているのである。たとえば、昔ながらのキリスト教、ヒンズー教、あるいはイスラム教のコミュニティーにおける一人間の実直な生活というものは、古風な忠実心を遮ることとなった階級あるいは国家の分断により、もはや不可能となった。しかし、いかなる宗教も、すすんでその主権を放棄し、その教義を無効にし、不誠実であると疑う物には忠誠心を持ってない懐疑的人間を受け入れることは、いまだできていない。私の個人的な知り合いの作家のほとんどは、伝統的宗教に回帰することをあきらめたか、幾人かは新たな宗教を模索はしたが、その何人かは、虐げられた人間は社会主義の中でのみコミュニティーにおける自己を実現できると信じるに至った。いずれにせよ、新しい生命とも言える若枝が急成長しており、我々の多くは新たな状況に自分自身を適合させるか、あるいは変化する世界を受け入れ、その只中で生きて行こうと試み始めている。我々に内在する混沌を無視しているわけではない。なぜなら、我々の世代はその内面の問題について、新たな心理学からの啓発を探求していたのであり、さらには、発展が自分たちを必要としているのか、あるいは自分たちが発展を必要としているのかと自らに問いかけながら、外的世界に向かって方向転換しようとしていたからである。

しかしながら、作家は特に英雄的な人物だというわけではない。彼らにとって、叙事詩のように生きるよりは、それを書くほうが容易でかつ楽しいのである。ヨーロッパの作家の多くは、自分たちの皮膚の色に拘りすぎて、ブルースト的な唯美主義のちょっとした別形態に耽っているだけであり、花を投げることによって革命を起こそうとしているのである。とはいえ、その幾人かは自分たちの市民としての責務を受け入れ、スペインに行きファシズムに対して戦った。しかも少数ながら、自分たち自身の問題を、アメリカ、フランス、インド、中国およびロシアの作家および知識人の問題として考えることを学んだ作家もあった。少なくとも確かなことが一つある。彼らは時代の進展、自分たちの目前で起きている変遷に対して関心を持つようになったのである。私は、1930年代に、文学において個人の問題は社会的問題に取って代わられたというのは真実であると考え。古くからの「運命」、「神」、「人の悪」および「自然」は、「一般人」に影響を与える新たな「運命」、「経済学」および「政治問題」にほぼ取って代われ、これらの語の鍵括弧が示唆するように、知的概念は、想像的文学を凌駕し、詩や小説の抽象化を促進する傾向があった。

中でも、人々の関心事がインドの現世代の心をすでに支配し始めていた中で、ヨーロッパの作家たちによる人の尊厳およびその文明の価値観に対する立ち遅れた認識は、我々をより近づけた。さらに、今風の礼儀正しい懐疑主義は極端な道徳的皮肉家、ファシストの手の内で踊らされているという事実に対する彼らの認識は、東の間の希望を生み出したのである。

しかしながら、残念なことに、平和、礼節、食料、文化を求めるグループの緩やかな集団化と、「自分」の哲学、あるいは指導者に導かれることを永遠に望む、家畜のような愚かな「平民」よりも高位の種族としての「貴族」の理念を基盤にしたファシスト的エゴイズム集団の速やかな組織化との間には、常に時差が存在するのである。民主主義国家の知識層における

そのようなエゴイズムが残存する場合、天罰は免れないであろう。

審美的に言うならば、今や「ピンクの十年」と言われる1930年代は失敗である、なぜならそこでは英雄主義は下火で、英雄的な行為に埋もれていたからである。しかし、その時期の主要な詩人や作家は、精神的退廃の原因を理解し、かつ沸き起こる大衆の感情の中に詩の題材を見い出そうと誠実に努めていたのであり、よって彼らはその支持者を統合しかつ再組織できる新たな時代の訪れを予見していたのである。

しかし、第二次世界大戦が勃発し、作家たちを散り散りにした。ある者たちは徴兵され、強制的英雄主義を受け入れなければならなかった。他の者たちは行動できないほど幻滅を感じていた。相変わらず別の者たちは魔術やヨガあるいはオカルトに没頭し、自家製の悪夢との闘いという現実からのより深遠な逃避を試み始めたりしていた。

つづく